

グランドゼロ

GROUND
ZERO JCF

88 夏

2011年7月26日 発行

- 福島原発事故被災者支援
福島の子どもたちを守りたい！



楽園

楽園に居る私、心地よさとほほえみ
そして敬い、ふたたびの心地よさ
昔の過ちのために打たれることも無く
艱難の中にあつてほめたたえられる

いともたやすく私は許されたことだろう！
通行許可証もなく、身軽なまま、そのように……
門番がぼんやりしていたのだろうか
スチクセ川は、暴風雨だろうか
小船に乗ったハロンは老齢なのだろうか
安酒屋の奴隷のような酔っ払いだろうか……

プラート・オクジャワ（1924～1979）

そこにいるのはだれ、臆病でやさしい
心配しないで、すべてうまくいく
きつとそうなる

私は神に誓つて言える……
しかし、ギターを置いていかねばならない
過去の人生に、この岸辺に
そして 過去の世界、帰り道への不安

私は約束した、ハーブに 豎琴に
金色の縁のついた木笛に
だけど愛にあふれた甘いたわ言をもつても
昔の日々を忘れることができない
誰かを裏切つたのだろうか、背いたのだろうか、
この岸辺で裏切つたのだろうか

目次

福島原発被災者支援 福島の子どもたちを守りたい!	チェルノブイリ・フクシマ		
	困難な時代をどう生きるか	<鎌田 實>	6
	震災から 100 日	<加藤丈典>	10
	福島原発被災者支援		
	今後の取り組み	<宮ノ尾秀彦>	14
	「福島原発震災の被災者支援募金」のお願い		17
	福島支援		
	原発被災者に寄り添って	<神谷さだ子>	18
	これから……	<鶴島綾子>	27
	連載 & お知らせ	連載随筆「未来への楽譜」 ^{スコア}	<宮尾 彰>
ベラルーシの食卓			32
モスクワ便り			33
振替用紙のメッセージから			34
ありがとうございました!			36
あの日何が起こったのか? JCO 臨界事故から福島 そして未来へ伝えたい事			
谷田部裕子さんのお話を聞く会		<横内香苗>	41
松本のお話の会に寄せて		<谷田部裕子>	42
Здравствуйте! (事務局広場)			44
カルチャーレビュー			46
インフォメーション		50	

福島原発被災者支援

福島の子どもたちを守りたい！



鹿島の寺内公民館に開設された「なかよし保育園」鎌田理事長（右端）

このまま、この地で暮らしていいのだろうか？
お父さんやお母さんは、子どもたちとここに暮らしていることに、不安を感じている。
大人の心の揺れを子どもたちも感じ取っている。
今、ストレスからの心のケアが必要とされている。

チェルノブイリ・フクシマ 困難な時代をどう生きるか



防護服着用で20キロ圏内の警戒区域に入った鎌田理事長(中央)

鎌田 實(JCF理事長)

3月11日、震災と共に福島原発に事故が起きました。JCFは福島原発から約25キロの南相馬市立総合病院の緊急支援要請を受けて、すぐに諏訪中央病院と共に支援に入りました。5月末まで10陣の医療グループを送るコーディネートを行なって来ました。福島県内に入り放射能の汚染状況を調査したり、住民の声を聴いたりしてきました。同時に子どもたちには、信州への保養や移住を呼びかけました。故郷を離れるのは忍びないためか、な

かなか決断をしていただけません。

子どもたちには、できるだけ被ばくさせたくないと考えています。政府が計画的避難区域の年間被ばく線量を20ミリシーベルトにした事に関しては、悔しいし、怒りたくもなりません。百歩譲って、色々な事情を考えると仕方ないとしても、子どもは一年間に20ミリシーベルトまで浴びても良いと思っただけではないのです。

どうしても子どもの許容量を設けるというならば、日本の自然放射線量である平均1.4ミリシーベルト／(年)以外の放射線に関しては、できるだけ1ミリシーベルト以内にするべきだと考えます。

グラウンドの土も、3.8マイクログロシーベルト以下ならば構わないと考えるのではなく、0.1マイクログロシーベルトでも下げるように努力するのが大人たちの役割です。

カタログハウスが、夏休み中の7月

末から8月の末に掛けて約4週間、僕の住んでいる長野県茅野市の蓼科のホテルでの母と子の保養をプレゼントするという企画が進められています。

その中に体調の悪い子がいれば、チエルノブイリでの医療経験がある信州大学の小児科で健診が受けられるように、JCFは信州大学の小児科医局やカタログハウスと話し合いを進めています。

カタログハウスとは企画段階から話し合いをしてきました。チエルノブイリでの94回の救援活動もカタログハウスから大きな応援をもらってきました。今回はカタログハウスの企画にJCFができるだけ応援をしようと思っています。

ピースボートは南相馬の子ども40人をベトナムからスリランカへの10日間の船旅に招待すると決めました。ある外資系の企業が航空運賃を持ってくれるはずでしたが、途中でキャンセルに

なってしまうました。アルピニストの田部井淳子さん、反原発ではカリスマ的な存在になった環境活動家の田中優さん、精神科医の香山リカさんなどに呼びかけ人になっていただき、僕個人として募金活動を始めました。少しの期間でも子どもたちが放射能の不安のない所でのびのびと過ごせるようになってあげたいと思っています。スリランカでは津波にあった若者たちと交流ができるようなプログラムが組まれています。

3月11日から、辛い悪夢のような毎日が続きました。子どもたちが世界を見て元気になって帰ってくれば、それを見て大人たちもまた元気になるのではないでしょうか。福島の子どもに夢と健康をプレゼントしてあげたいと思っています。

想像を超えて、放射能の汚染は広がっています。1平方メートルあたり148万ベクレル、これはチエルノブ

イリで当時使われていた単位で言うと、1平方キロ当たり40キュリー以上に当たります。ベラルーシ共和国では1平方キロあたり40キュリー以上の地域は強制移住させられました。それが3100平方キロに広がりました。

なんと福島では、同じ40キュリー（148万ベクレル以上）の地域が600平方キロメートルあると算定されています。福島の中にもかなりの高汚染地域があると言うことです。

6月11日、土木作業員の健康管理のために20キロゾーンの立ち入り許可が出ました。福島原発から3キロの所まで浜通りを移動しました。多くの地点で線量を測定しましたが、1マイクログシーベルト／（時）以下でした。放射性物質を含んだ雲が風に乗って北西へと進んだことは明らかです。情報隠しが行われたスピーディー（SPEED I）緊急時迅速放射線影響予測システムが示していた通り、放射能の汚染は帯

状に広がっています。原発から3キロでも真北にある双葉町の海水浴場あたりは放射能汚染が非常に少ないことがわかりました。

福島原発から20キロゾーンの面積は、ほぼ628平方キロですが20キロゾーンでも半分の地域(真北と南側)はそれほど汚染はされていません。

おそらく20キロゾーンを超えた所の300〜400平方キロの範囲が、带状に、しかもまだら状に、高度に汚染されたと考えないといけないと思います。福島市で京都精華大学の山田教授らが、学童の通学路の草むらで28マイクローシールベルト/(時)を測定したりしています。おそらく郡山市、福島市、伊達市の一部にもホットスポットがあると考えたほうがいいでしょう。飯館や浪江だけではなく、心配な地域が広がっているように思えます。

JCFが支援をしている南相馬市の大原地区を神谷事務局長と訪ねまし

た。ここは特定避難勧奨地点に指定されませんでした。国はあやふやでわかりにくい指定をなし崩しのに次々に作ってきます。僕らは大原区にガイガーカウンタを持って入りました。住民の聞き取り調査も行いました。チェルノブイリほどの広範囲ではありませんが、チェルノブイリに近い汚染があったと考えるべきです。

7月7日『なさないけどあきらめない―困難な時代をどう生きるか―』(朝日新聞出版社)を出版しました。

出てしまった放射能。今まで考えてもいなかった放射能との共存。鎌田流の生き方の哲学を一冊の本に示しました。悔しくて、情けなくて、怒りながら、書いた本です。

僕の話をしませう。僕はチェルノブイリに子どもたちの検診に行く時もあります。福島県に巡回診療に行く時もあります。その時は多少の被ばくは覚悟します。あんまり神経質になると

心が疲れてしまうので、割り切るようにしています。

日本でこんな大きな事故が起きてしまった以上、救援に入るために、今年1ミリシーベルト以内を目標にしながら5ミリシーベルトぐらいまでは仕方ないかと思うようにしています。人に強要はできません。これは僕の覚悟的なもので、決して科学的ではありません。20年間チェルノブイリと関わりながら自分が磨いてきた感覚です。

しかし科学的という言葉が今回いかにかに軽いものが分かりました。「日本の原発は事故を起こさない」と原子力村の学者や東電の幹部がよく言っていました。科学的というのは想定を超えたときになんとも無力であることがよく分かりました。科学的よりも時は磨かれた感覚の方が、身を守る力になると僕は信じています。

福島で生活せざるを得ない人たちも、子どもはできるだけ自然放射線以

外、年間1ミリシーベルト以内を目標にする。大人たちもそれを同じように目標にしながら、時には1ミリシーベルトを少し超えてもあまり精神的に参らないことが大事。少しオーバーした人は、翌年ではできるだけ1ミリシーベルト以内になるように生活の改善を目指す。あるいは5ミリシーベルトを超えた人は、そこで移住をもう一度考えるというのも良いのではないかと思っています。5ミリシーベルトを超えるとは危ないかと聞かれると、そうでもないと答えます。

100ミリシーベルトで0.5%、がんになる確率が高くなる。0.5%は、たいしたことないか考えるか、絶対に許せないか考えるか、どちらの間違ひではありません。大事なことは、1マイクログラムシーベルトだって、余分な放射能はなるべくあびないように注意することです。人様に強制できるほどの論理的なものはありません。この20年いつも

こういう考えのもとに、JCFのスタッフや信州大学のドクターたちにチェルノブイリに行ってもらってきました。もちろんチェルノブイリに行く人も、福島に巡回診療に行く人も、自己決定で、それぞれの人生観の中で、決めてもらってききました。

福島の人も福島県外の人もそれぞれの生き方を自己決定するために真の情報公開が欲しいのです。政府や東京電力は情報公開をしてこなかったと僕は考えています。それがどれほどの大きな罪となるのかは、僕の本を読んでもらえるとわかると思います。

JCFはこれからも被災した人達の立場に立って、移住や保養をすすめるが、移住できない人達がいるとすれば、その人たちをどう支えてあげたら良いのか、少しでも良い方法を、少しでも良い支援を、行っていきたいと思っています。

本当に沢山の人が新たにJCFを応

援してくれるようになりました。20年間ずっと応援してくれている方々も、さらに熱い応援をしてくれています。皆様の熱いお心に添って、本当に困っている福島の被災者の方々に、どこよりも温かな手を差し伸べていきたいと思っています。これからもご支援をお願い致します。



南相馬避難所で鎌田理事長（左端）

震災から 100 日

加藤 文典



南相馬市老健施設跡

かつて南相馬市の原町に東洋一の高さを誇る無線塔が聳えていた。コンクリート製でその高さは200メートルもあった。対アメリカ通信網の確立のため大正10年に作られたもので、昭和33年に東京タワーが完成するまでは、日本はもちろん東洋一高い建築物であった。大正12年の関東大震災の際、地震発生の一報はこの塔から世界中に発信され、アメリカなどから救援物資が送られたそうだ。無線業

務の役目からはとくに御免となっていたが、1982年に解体されるまで、原町の人々に地元のシンボルとして長い間慕われた。現在はその雄姿を惜しむ地元の人達によって10分の1スケールのミニチュアが建てられかつての姿をとどめている。

3月15日に発生した福島第一原発3号機の水素爆発直後、原発から30キロ圏内に位置する南相馬はパニックに陥った。自主避難区域に指定されたここでは、明確な避難先も指示されなかったために、人々は行く先々の避難所を点々とし、何日も車中泊で凌いだ人も多かった。中には「原爆が落ちたのと同様のが起こったのだと思った」と当時のことを振り返る人もいた。放射線による被害が懸念されたために、食糧や燃料を運搬するトラックはおろかメディアすらも立ち入れずライフラインは断たれ、陸の孤島と化した。そのような中、南相馬市長は、市が直面する窮状を電話を通じてメディアに訴え、支援を求めた。まるで関東大震災の一報を発信した原町無線塔のようだ。

支援で長く南相馬に入っているうちに「元々ここはどういうところだったのだろうか」と気になりだしてしまった。相双地区の郷土史を調べてみると色々興味深い。福島県

浜通りの南相馬市、相馬市を合わせて相双地区というが、かつてここは相馬中村藩の領地だった。この相馬中村藩の9代目当主^{しんなん}祥胤の時、冷害や火山噴火による天明の飢饉（1783年）が起こり東北地方全域に大規模な被害をもたらした。相馬藩もこれを免れなかった。一説では領民の3分の1が餓死したともいわれている。藩主祥胤はこの危機を打開するために幕府から5千両の金を借りたりしたが被害は拡大し続けるばかりだった。これに加えて農民達は困窮のため逃散し、また口減らしのための間引きが横行したために赤子の出生、育成が思うように進まなくなってしまったという。藩滅の危機といっている。藩はさらに策を打ち出した。養育料給付、荒地開墾、儉約、さらに藩政の大改革「文化の御厳法」を発し藩の格式をこれまでの6万石から1万石に切り下げた。こうした藩政改革によってできた蓄えにより1833年に再びこの地を襲った大飢饉（天保の飢饉）の際には一人の餓死者も出さずに乗り切る事ができたようだ。しかしこの飢饉によって蓄えは底をついてしまい、藩はさらに向こう10年間の検約策に加え、大胆な政策を断行せざるを得ない状況に追い込まれた。そこで打ち出されたのが移民誘致政策である。

福島第一原発からほど近い双葉町に真宗大谷派の正福寺

という寺がある。20キロ圏内の立ち入り禁止区域内にあり、現在どうなっているかはわからない。この寺が相馬中村藩の行った移民政策のことを伝えている。寺記によると当時の領民は「古椀を抱えて食を乞ふ」ほどに窮していたという。餓死、逃散によって領民はいなくなり、城下は空き家だらけ、田畑は荒れ果ててしまった。移民誘致政策は、荒地の開墾と藩歳入の増加を一遍に為し得る良案だった。しかしこの時代は幕府が発した「百姓法度」によって農民の移動は固く禁じられていた時代である。それを侵しての大断行だ。相馬領にやってきた移民の多くは北陸越中の真宗門徒であったために彼らは「真宗移民」とも呼ばれた。この移民によって藩は窮状の打開に成功し、またこれまで浄土真宗の基盤が薄かったこの土地にこの移民とともに真宗文化が持ち込まれた。火葬などの習慣がこの地に伝わったのもこの時だったという。

実は北陸越中からの移民の中には私の出自である能登からのもも含まれていたようだ。これを知った時、私と南相馬は改めて繋がった。当時、我々の先祖も相当に困窮していたらしい。相馬同様に飢饉に喘いでいた。また真宗では間引きは硬く禁じられていたために、一家の次男坊、三男坊はおれども行き場がなかった。こうした者たちが新天

地を求めて600キロ離れた相馬までの道程を1か月かけて歩いた。「百姓法度」の取り締まりが厳しく、人相書も出回った。死刑にされた者も多く、能登から相馬まではまさに命がけの旅だったろう。新天地での生活は当初、新参者と先住の者との間で摩擦もあっただろうが、私の祖先は田を与えられ、少しずつ相馬に根を下ろしていった。先祖は移住以来、相双の人々に受け入れてもらったのだ。先に「改めて繋がった」と書いたのは、これまで何度も南相馬に入っている間にここに住む人々との絆ができていたからであり、それがこの土地の歴史を知ったことでそれが一層強くなったということだ。JCFのスタッフは行く度に南相馬の人々に手厚くもてなされているが、200年前に私の祖先も同じようにもてなされたのではないか。

いま福島は天明の飢饉のような危機に見舞われている。田畑は荒れた。海の幸も獲れなくなってしまった。田も海も以前と変わらぬ姿でそこにあるのにその恵を享受することができなくなつた。人の手による災いによつてだ。

越中五箇山から相馬に移住した移民を描いた新聞ゆり子の民謡小説『海からの夜明け』に次のような言葉がある。

「たとえ世のなががどのようになつていこうが、人間が

生きていくかぎり、食い物を作らねばならん。その食い物を作るのは百姓や。その気持ちをもちつづけるものこそ、わしらが子孫じゃと思つて、書き残すことに決めたがい。」

歴史の多くの苦難を乗り越えながら、相馬の農家の人々は農業を営んできた。人間が生きていくのに必要なものは、貨幣ではなく、出世でもなく食べ物だ。食べ物なくなつたら生物は死ぬ。現代の物質文明の中に生きていけるとそういう根源的なことを忘れがちになる。

何百年というスパンで核廃棄物を地層に埋め続ける原子力政策は使用済み核燃料を生み出し続けるというその一点においても成り立たないと思つている。大地が汚染されるリスクを負うのは子孫だ。食い物を作ることができなくなるリスクを負うのは子孫だ。今我々がやっていることは「命の連鎖を継続するために食い物を作り続ける決意を子孫に伝え続けた」先人達とはまったく逆のスタンスのものだ。

「いつまでここにいらつしやるの？」という挨拶が交わされるようになった。事故後も南相馬市に残る若い母親の言葉だ。「朝が来て自分達だけが取り残されていたら…」という不安と共に生活している。南相馬市は30キロ圏内に

位置しながらも福島市等と比べると線量は低い。そのため多くの市民が一時避難先から帰ってきたが、このように不安の中で暮らす母親は多い。

放射線からは「逃げる」ことしかできないのだから、いっそのこと福島から離れて欲しいと思う。もちろん故郷を離れることは難しい。経済的な理由に加え、土地への愛着もある。しかし南相馬の郷土史にみられるように私の祖先はここに受け入れられ、新たな故郷を作った。200年間ここで世話になってきたのだ。これは能登と相馬の歴史に限ったことではない。島国で単一民族で、言語も一つで、宗教紛争もない日本ならどこでも福島の人々の故郷を作ることとは可能だと思う。

このまったく逆の条件を持つ国家であるイラクにいた身としては日本のそういう特異性を今こそ活かすべきだと思っている（ちなみにイラクは6か国に囲まれ、公式言語は二つだがそれ以外にも多数あり、また武装組織によるテロは現在も続いている）。

私は日本には福島の子も達、そして土地を失った農家の人たちに「おかえりなさい」といって迎えることができるような素地が存在すると思っているし、ただか60年程度の核文明に人類有史以来の農業文明が負けるわけがないとも思っている。悲観材料は多いが、南相馬はかつて

の危機を乗り越えてここまで続いてきた。「歴史は繰り返す」ならば、困難を乗り越えることもまた繰り返されると思っている。



ガラスパッジの説明をする加藤（右端）

福島原発被災者支援

今後の取り組み

宮ノ尾秀彦（事務局）



鹿島の寺内公民館に開設された「なかよし保育園」

3月11日の原発事故以降JCFでは福島県の南相馬市に住む人達、特に子どもたちの健康に関して何ができるかを考えてきました。

放射線という目に見えない脅威から子どもたちを守るためには、放射線を放出し続けているフクシマ第1原発からできるだけ離れた場所に避難するしかありません。JCFではその思いから子どもを持つ家庭に対して、長野県に避難することを呼びかけました。しかし避難を決意できるほどの具体的な条件を提示できなかったことや、それぞれの家庭の事情によって避難してもらうことは叶いませんでした。

ではそこに住み続ける人達に対して何ができるのかというところで、まずはガラスバッジ（簡易線量計バッジ）を配布しました。

このガラスバッジというのは、業務上放射線の被ばくを避けられない業務に従事する人が、業務中の累積線量を管理するために使うものです。但し、このバッジが測定できるのは外部被ばくだけで、最も問題と思われる内部被ばく量は測ることができません。また累積値しか判らないので、被ばくを避けるという用途においても役には立ちません。しかしこのバッジで測定された外部被ばく量が高い数値

であれば、避難を決意するための重要な指標となるでしょう。

今現在では、福島県内のいくつかの自治体でも、このガラスバッジを子どもたちに配布し始めました。線量計という名前のイメージからか、マスコミ等では「これで安心…」といった論調も散見されます。しかし健康に最も害があると思われる内部被ばく量が判らないので、もしバッジで測定値が低かったとしてもまったく安心とはいえません。

本来このバッジは自らの意思でその職業を選んだ人たちがその作業に従事する間（管理区域内※での仕事）の被ばく量を管理するための物です。そのような用途のバッジを、普通の子どもたちが着用して生活しなければならぬという事です。これは子どもを含めた一般の人々が本人の意思にかかわらず、管理区域内※に、または内部被ばくの可能性もあるという点においては、汚染管理区域内※に暮らしているということの意味します。その異常性について、異議を唱えなければなりません。その異常性の象徴として、このバッジは意味を持つものではないでしょうか。

次にできる事として考えたのは、短期間だけでも長野県に来て保養してもらおうという事でした。

子どもたちは放射線の問題から外で遊ぶ事もできず、プ

ールの使用も制限されています。親たちも不安の中でストレスを感じて生活しています。せめて夏休みぐらい思いっきり外で遊ばせてあげたい。そんな思いから親子での保養旅行を計画することにしました。

すると同じような企画を長野県でも、そしてJCFが長年にわたり大変お世話になつてきたカタログハウスさんも考えていました。JCFだけでは資金面や人員面で限界があるので、今回はカタログハウスさんの企画に協力するという形で企画を進める事となりました。

「福島っこの夏休み〜7泊8日の母子旅〜」と称して、福島県に住む子どもたちとその家族を対象に、7月25日から8月29日までの約4週間にわたり、計四百組の家族を長野県に無料招待するというものです。JCFでは信州大学医学部附属病院の小児科の協力のもと、希望者に対して健康診断とカウンセリングを行う予定です。つかの間でも子どもたちに楽しんでもらえればと思っています。

今後の支援

今後JCFではホットスポット（高線量地）を避けて生活してもらうために、線量率計（ガイガーカウンター）を子どもがいる家庭に配布する事も計画しています。

身近な場所の線量を測ってもらいながら、ローカルでの汚染地図を作成してもらおう。そしてホットスポットをパイロンやテープで立入禁止場所にして、子どもが立ち入らないようにする。そうやって、自らの意思で少しでも被ばくを避けることができるようにするため、なるべく多くの線量率計を配布できるようにしたいと考えています。



第一次支援でJCFが借りていったウクライナ製線量計

何度も見てきました。このような悲劇を二度と起こしてはならないとずっと思ってきました。しかし同じ悲劇がこの日本で起きてしまいました。20年という長い活動期間があったにも関わらず、子どもたちにまた同じ涙を流させてしまうことについては自責の念に耐えられません。チェルノブイリとは違い、今回の事故は日本で起こった事であり、私たちもその当事者として重く受け止めなければならないと考えています。

その意味において、子どもたちの涙をぬぐう事だけではなく、涙を流させない社会を作っていくことが私たちを含め大人たちに課せられた責任ではないでしょうか。子どもたちの未来に対する責任を重く感じながら今後も活動を続けていくつもりです。

.....

※「管理区域」とは

原子力施設や放射線利用施設等であって、関係者以外の者の無用な放射線被ばくを防止するとともに、施設内で作業する人の被ばく管理を適正に行うため、放射線被ばくのおそれのある区域を他の一般区域から物理的に隔離した区域を管理区域という。このうち外部被ばくのみの可能性のある区域を放射線管理区域、内部被ばくの可能性がある区

JCFは「一人の子どもの涙はすべての人類の悲しみより重い」との理念のもと、チェルノブイリ原子力発電所の事故による子どもたちの放射線健康被害に対して、医療支援を20年間に渡り行ってきました。ここでは何の罪もない子どもたちが、つらい病気を経験する姿や、命を失う姿を

域を汚染管理区域と呼んでいる。

放射線障害防止法の施行規則第1条1号及び平成12年告示（平成18年最終改正）第4条では、管理区域として扱べき区域を以下のとおり定めている。

- （1）外部放射線に係る線量が実効線量で3か月あたり1.3ミリシーベルト（mSv）を超えるおそれのある区域。
- （2）空气中の放射性同位元素の濃度については、3か月間の平均濃度が空气中濃度限度*の10分の1を超えるおそれのある区域。
- （3）汚染された物体の表面の放射能密度が表面密度限度の10分の1を超えるおそれのある区域。
- （4）外部放射線による被ばくと空气中の放射性物質の吸入による内部被ばくの双方の可能性がある場合には、上記の（1）と（2）に定める基準値に対するそれぞれ別の比の和が1を超えるおそれのある区域。

管理区域の出入口では、人や物品の放射能汚染が厳しく管理される。

* 空气中濃度限度とは「1週間についての平均濃度」である。

「福島原発震災の被災者支援募金」のお願い

JCF では被災地支援のため募金募集を行っております。

6月末日までに32,722,712円のご寄付が集まりました。たくさんの応援をありがとうございます。

頂いたご寄付は、原発被災者支援の医薬品と現地で必要な物資の購入費、またその搬送費、ガラスバッジ購入費諸経費・線量率計購入経費、被災地の子どもさんの夏休み保養での健康診断経費等に充てます。

以下の郵便振替口座に「震災支援」とご記入下さい。

口座番号：00560-5-43020

口座名：日本チェルノブイリ連帯基金

連絡欄：震災支援

インターネット銀行および他金融機関からの振込用口座番号

059（ゼロゴキュウ）店（059）

当座 0043020

原発被災者に寄り添って

神谷さだ子（JCF事務局長）



原発から3キロ双葉町

地震・津波・原発震災

3月11日午後2時46分、この時から、私たちは、未曾有の体験を重ねてきた。私たちは、未曾有の体験を重ねてきた。

地震と原発。狭い地震列島日本の中に54基の原発がある。私たちJCFは、20年間、チェルノブイリの被災地に支援・交流活動を続け、高汚染地域を歩いてきた。もともと放射性物質は、人間が制御できるものではない、と思っ

ている。大変な事が起きてしまったと直感した。

25年前の旧ソ連邦では、情報が統制されていた。共産党の機関紙『プラウダ』に「ウクライナのチェルノブイリ原子力発電所で事故が起こった」とベタ記事が載ったのは、事故から2日後だった。拡散した放射性物質による被害を大きくした一因が、情報が国民に知らされなかったことだ。

現在の日本はどうだろう。福島第一原発に関して国から発表される情報

は、まったくさきだ。

事故直後の混乱を差し引いても、根拠のない言葉ばかり並ぶ会見に腹が立って、憤りが抑えられなかった。国と東京電力は、事態を把握できなかった。その場しのぎの応急措置に追われて、いまだに、収束の見通しは立たない。

原子力安全・保安院が経済産業省の傘下にある事はどう考えても問題だ。経産省は原発を推進してきた。客観的、批判的な見方ができるとは思えない。両者が並んで言う事に、私たちは聞く耳を持たない。

命と相いれない放射性物質

1999年のJCOの事故後、JCFは放射能の基礎知識から、もしもの時の防護対策まで、連続講座で学んできた。しかし、その知識を実際に使う日が来ようとは、なんていうことだろう。当初レベル4だった福島第一原発

事故は、レベル7に引き上げられた。私たちは、連日「マイクログシーベルト（ μSv ）」「ミリシーベルト（ mSv ）」「ベクレル（ Bq ）」「グレイ（ Gy ）」とこれまでなじみのなかった放射線単位を聞くようになった。そして、急ぎよ、原発作業者の被ばく基準値が年間250 mSv に引き上げられたり、福島県内の学校の校庭の基準値が20 mSv から1 mSv に変わった。基準値の持つ意味にさえ、翻弄されることになった。

2000年にお亡くなりになった高木三郎さんは、「放射性物質は人間、命と相いれないものだ」と言われていた。そして「人間の手では制御しきれないものである」とも。今、さまざまな方が、福島第一原発と福島県民の置かれていた立場について発信しているが、私は高木さんの言葉を基本とする立場をとりたいと思っている。基準値

以内だから安全とはいえない。自然放射線以上の放射線は、浴びないにこしたことはないのだ。

チェルノブイリ原発の大爆発事故は、黒鉛型原子炉の構造的な欠陥と出力試験中の人為ミスによる事故とも言われている。今後、福島第一原発についても、検証されていくことになるであろう。しかし、地震・津波の直後から、補助電源が作動しなかったことを思うと、想定外の自然災害が問題とされる以前に、原発震災への備えが全くされていなかった事に大いに疑問を感じる。日本の原発は、海に面して建設されている。地震大国にあつて、当然担保されていなければならぬ対策ではないだろうか。

福島第一原発の老朽化の問題と併せて、検証していただきたい。

南相馬支援のはじまり

JCFが南相馬とコンタクトしたのは、鎌田理事長が、南相馬市立小高病院長の遠藤先生に安否をたずねる電話を入れた時からだった。

小高病院は福島第一原発から17キロの所にあつた。地区には約1万人の住民がいた。あたりは津波にさらわれた。67人の入院患者を、エレベーターの止まった中、スタッフ全員でいったん二階から三階に上げたそうだった。

「病院の前にプラスチックの貯水樽を置いて、津波にあつた人の体を拭いた。お米を炊いて、おにぎりを作り、休みなく働くスタッフの食糧にした」と、震災直後の必死の二日間を小高病院の管理栄養士の鶴島綾子さんは語った。

13日、緊急避難命令で、南相馬市立総合病院に避難しなければならなくなつた。

当初は、3キロ、そして10キロ、20キロと避難区域は同心円状に拡大し、

南相馬市の市庁舎がある原町地区は、20〜30キロの屋内退避区域に指定された。人々は、家に閉じこもらなければならぬ。物流が止まった。

遠藤先生たちは、更に、患者さんを南相馬市立総合病院から新潟や山形の病院に移送しなければならなかった。鎌田先生の電話に、総合病院で酸素吸入している患者のための液体酸素が底をついているとSOSが出された。この時から、JCFの福島支援が開始した。

ガソリンが入らない。商店は閉まつたまま、この状態で、屋内退避など続けられる訳がない。南相馬の桜井市長は、インターネットを通じて世界に向けて、窮状を訴えていた。

JCFは、市長や総合病院と連絡を取りながら、3月20日深夜、松本を出発した。南相馬に入った21日早朝は、総合病院では搬送が終わった直後、たつた。水素爆発の恐怖におびえながらも、

避難することなく病院に残ったスタッフ達は、疲労困憊していた。

避難所にて

その後、屋内退避区域から緊急時避難準備区域となり物流は復活したが、子ども・病人・要介護者は生活してはならない事になっている。しかし、県外の避難所での生活に耐えられなくなつて戻つた人、物流の復活と同時に、職場が再開して、家族と共に戻つた人もいる。津波・震災の被害を受けなかつた方は自宅に戻り、自宅が被災した方々は、避難所で暮らしながら職場に通っている。

3月末は、2か所の避難所で、それぞれに70人位だった。3か月経つた現在は、4か所に各百人以上いる。南相馬市原町地区の石神小学校体育館には、小高地区で津波被害にあつて、家をなくした方々が大量避難している。



南相馬市ダイケアひまわりの避難所

顔見知り同士で、声を掛け合っているようだった。桜が咲き始めた4月半ば、松村さんというおばあちゃんに話を聞いた。「うちの庭にも、桜の木が3本あって、はあ。いっぱい咲いてるかも。連日は13年前に亡くなつて、一人暮らしだよ。長男・長女は、家庭をもつてる。

今しばらく、一人でやってみる」
松村さんは、人懐っこく、話してくれるので、石神小学校に行く度、真っ先に声をかけていた。

津波に襲われて、胸まで海水につかった。柵のようなものにつかまっていたところを助けられたそうだ。「記念に持っている」と、手荷物の中から泥にまみれたお財布を取り出して見せてくれた。自宅は、一階の柱は残っているが住める状態ではない。何よりも、20キロ圏内、警戒区域である。

「おら、生きていてよかったんべか……」ある時、松村さんが、つぶやいた。家庭菜園を作り、ゆつたりと暮らしていた。生死の狭間から救出された80歳のおばあちゃん。突然の避難所暮らしをする心の内はいかばかりであったろうか。

原町第一小学校の体育館は新築されて、6年生の卒業式にお披露目されることになっていた。舞台の壁に「卒業

式」と横一文字が貼られたまま、体育館は避難所に変わった。新築の化学物資の匂いがしていた。

3月21日午後から、遠藤先生の案内で、諏訪中央病院の医療チームと健康診断に行った。皆さんどうですか、と声をかけていくと、診てほしいが歩けないという方がいた。

車いすに乗ったEさんは、避難所開設の時から、お母さんと二人でここに来た。東京で仕事をしていたが、脳梗塞を患い右手足が不自由になった。故郷の南相馬に戻り、母にサポートしてもらいながら、暮らしていた。少し高台にある家は無事だった。しかし、20キロ圏内にあり、戻れない。広い体育館に、ブルーシートと布団が敷いてある。でも、床に敷かれた布団に寝ると、母一人の介護ではトイレに行けない。16日間、車いすに座ったまま眠った。冷たいおにぎりと菓子パンが配られた。1日2食だった。

ようやく5月になってベッドが搬入され、楽になった。「いつも車いすで移動しているので目に留まったのね。新聞に何回も取り上げられたのよ」とおおらかに笑う。早く仮設住宅に入ってプライベートが確保できる生活をしたいと願うが、5月末の第一回の抽選には当たらなかった。

避難所は今後暑さ対策も迫られる。食中毒やダニ予防にも気を配らなくてはならない。

諏訪中央病院医療チーム

当初、南相馬市立総合病院からのSOSに何とか応えたいとJCFが動き出そうとした時、何度か連絡がうまくいかなかった。病院は、閉鎖の方向で進んでいた。

しかし、その地に、まだ暮らしている人々が居る限り医療は必要だと鎌田理事長とも話した。南相馬市桜井市長



避難所で問診する諏訪中央病院医師

からの要望品と必ず使うはずの医薬品を4トントラックに積んで出発した第一次派遣団だった。

第一陣の佐藤泰吾先生、原稔先生、宮沢英典看護師は、お薬外来と避難所での健康診断、当直と休みなく働いた。現地の医療者に休んでほしい、自分たちはいずれ撤退するのだから、カルテを引き継げるように整理して残してい

く、と支援への立場は、明快だった。それから、6月13日の光榮先生まで、毎週末、諏訪中央病院医療チームは南相馬で、災害医療支援を行った。短い期間でできる限りのことを最大限に行おうとする姿は、総合病院の金沢院長をはじめ、多くの方々の心に刻まれ、力となった。

日曜日の午後、帰路に着く私たちを送ってくださる先生達の目に涙が光る事があった。避難所に泊り、歩こうとしないおばあちゃんの手を引く浜看護師、ゆつくり話を聞く寺口看護師、諏訪中央病院の、ベテランの村田先生をはじめ若い後期研修医のお医者さん達も皆、それぞれに印象に残る活動をされた。個人的で、すばらしいお医者さん、看護師さん、薬剤師さんたちだった。チームが南相馬で紡いだ絆は、現地の方々を励まし、未来に向かう力を繋いでいった。

「私たちは、皆さんからの応援が無

くては、震災後ここまで病院をやって来られませんでした。もし将来、日本のどこかで、このような災害が起こったら、今度は私達がお返ししたいと思っています」と、南相馬市立総合病院の及川先生が言われた。

飯館 計画避難区域

第一次派遣団が、東北道を降り、南相馬に向かう途中、放射能簡易測定器が突然、振り切れた。飯館村だった。福島原発から50キロ。阿武隈山地に入るならかな山里である。よく霧がまわく地域だ。事故当初、メルトスルー(溶解貫通)が起き、たぐさんの放射性物質が大气に拡散し、浜から北西の風に乘ってこの地に運ばれ、降下したと思われる。実測によって計画避難区域に指定されたのは、4月12日だった。5月末日までに、住民は避難しなければならぬ。



飯館村の佐藤さんの牛舎

木々が芽吹き始め、桜が満開になるころ、飯館村の役場から浪江町方面に車を走らせた。村に入っていくと、風景は一転した。どの田んぼも耕されず、放置されている。村内に、灯かりが見えない。

なだらかな山道に入っていくと大きな牛舎が何軒もある。「飯館

牛」は肉質を誇るブランド牛だ。

五百頭近い牛を飼っている佐藤さんの牛舎を訪問した。佐藤さんのお父さんが、7頭の牛から始め、家族で力を合わせて頑張ってきた。

他の地に移したら、肉質が変わってしまう。牛の体線量を測ったが問題なかった。避難はしたくない、と言っていた。しかし、5月半ばに再び訪れた時は、移住を覚悟したようだった。牛舎に近づいていくと、牛達がいつせいに大きな瞳をのぞかせて、寄ってくる。手塩にかけた牛達を手放さなければならぬ苦渋の決断だった。

目に見えない、匂いも無い放射性物質の突然の降下で、生活が断ち切られる。チェルノブイリで見てきた光景が、今、日本で起こってしまった。

水が張られない田んぼにオタマジャクシが泳ぐことはない。カエルの歌が聞こえない。緑が深まる飯館。土地に根ざして暮らしてきた人々がいる。緑

り返してはならない放射能災禍の下にたくさんの命がある。

緊急時避難準備区域に残る妊婦さん・子どもたち

大気に拡散した放射性物質による外部被ばくや内部被ばくによる健康リスクは、妊産婦、乳幼児、子どもたちが最も危惧される。いつ収束するとも見通しのつかない原発に、まずは「子どもたちを守りたい」と、4月末から、長野県に避難するよう呼びかけた。各避難所を回って、子どものいる家族に声をかけた。

しかし、長野県は遠くて、知り合いがいけない、これまでの生活を断ち切るわけにはいかない、友達がいる学校に通わせたい、親の仕事が再開したので、ここを離れるわけにはいかない、等の返事が返って来た。

「緊急時避難区域に、子どもたちが

居てはいけません。でも、物流が復活して、親の仕事が再開すると、たくさん子どもたちを街で見られるようになりました。行政は、保育園の再開を認めませんが、私たちは、私立の三保育園で力を合わせ、ここ鹿島の公民館で、子どもたちを預かる事にしました。補助金は出ません」

福島第一原発から20〜30キロ圏内は微妙な地域になっている。距離の離れた福島市や郡山市よりも、線量が低い地域もある。しかし、小中学校、幼稚園、保育園は閉鎖された。子ども達は、原町地区から、比較的放射線濃度の低い鹿島地区の学校まで、スクールバスで通っている。保育園は、5月から鹿島の寺内公民館を使って再開した。

放射性物質の線量が比較的低いとは言っても、子どもを持つ親たちは、皆不安に揺れていた。子どもたちに、顔面神経痛・円形脱毛症・過食・爪かみ・赤ちゃん返りなどが見られるという。



避難所の母子と諏訪中央病院看護師

「今日、室内の放射線量を計りました。0.2マイクロシーベルトでした。いたい、いくつまでだったら大丈夫なんでしょうか？ チェルノブイリ支援を20年間続けてきた方なら教えていただけと期待していました」

私たちは、子どもたちにガラスバツジを付けて、外部被ばく線量を測りながら生活管理しようと提案するために訪れたのだが、言葉を失った。妊婦さんや子どもたちは、どんな場合も被ばくしないに越したことはない。暑さ対策もしなければならぬ。外で自由に遊ばせられない。マスクも長袖の服もかわいそうな気がする。

5年後、10年後に出るかもしれない健康被害以上に、今のストレスにさらされている子ども達のところが心配だ。

後日、長野県の社民党から、このなかよし保育園にエアコンが寄付・設置された。

原発労働者の直接被ばく

何と言っても元を断たねばはじまらない。今、一番心配しているのが、原発の収束作業に当たっている作業員た

ちである。直接被ばくで、多量の放射線を浴びないよう、作業時間と防護をきちんと管理してほしい。

事故から三か月たつて、次々に明らかになる原発内での作業の遅滞に、核燃料は本来人間が扱ってはならないものだと、改めて思い知る。しかし、そうとばかりは言っていられない。アメリカ・フランスの原子力専門会社と共に、英知を結集して放射性物質の拡散を止めてほしい。私たちは、祈ることしかできない。

短靴で、高濃度の汚染水があふれる構内に飛び込んで行った原発労働者の被ばくによつて、東京電力の正社員ではない、子請け・孫請け・曾孫請けの原発労働者により、原子力発電所が支えられていることが明らかにになった。

原町第二中学校の避難所の入り口近くに初老の男性がいた。40年近く原発で働いてきたという。今は年金暮らし

だが、今度の事故でお呼びがかかった。原発は自分の職場だ。福島だけでなく、敦賀、新潟と原発建設の現場をわたってきた。今度も、事故の収束のためにできることがあったら、行くつもりだ、と言っていた。

第一小学校に避難していた方も同様だ。原発の燃料棒の部品調達を長年やってきた。自分の会社でなくてはできない仕事だった、と誇りを感じる語り口だった。総合病院の玄関で血圧測定をし、近くのビジネスホテルでお風呂に入つて避難所に戻るコースが彼の散歩道になっていた。

福島第一原発事故で、衆目の知るところとなつた原発労働の過酷さ。その原子力発電所によりエネルギーが生産され、物が過剰なまでにあふれた私たちの生活がなりたつていたのである。原子力発電所は、その象徴として存在している。この大きな事故によつて、私たちは、これからの暮らしの有り様

を、考え直していかなければならないと思う。

電気エネルギーは大切だ。しかし、発掘から始まり、輸送、燃料への濃縮、廃棄処分、核燃料はすべてが危険に満ちている。何とか自分たちの手で、安心安全な社会作りへ方向転換していきたい。

今、長野県では、阿部知事の肝いりで、自然エネルギーへの転換プログラムが市民を中心に進められようとしている。これが、日本全国に広がってほしい。そして、もう、原発はいらない。原発に向かって皆で言いたいのだ。

「さようなら、原子力発電所！」

これからの暮らしを考える

収束の見通しのない福島第一原発事故。大気への拡散は今後、そんなに多くはないだろうとも言われている。しかし、汚染水の処理が大問題になった。

大海原への放出は、放射性物質を世界中にまき散らすことになる。

放射性物質の濃度が低くても、呼吸や食べ物から体内に取り込む低線量内部被ばくの問題は深刻だ。晩発性障害として、事故から数年後に症状として発症する。しかし、内部被ばくについては、それぞれの免疫能の違いもあり、しきい値（これだけの線量を被ばくしたら、何人の人ががんが発症するという値）は決められない。特に妊産婦、乳幼児、成長期にある子どもたちは、新しい細胞が作られていく過程でのDNA損傷は避けたい。

地方自治と防災対策

東日本大震災と阪神淡路大震災が、大きく違うのは、その広域性だと言われている。

未曾有の大地震と津波の映像がTV画面から繰り返される毎日に、私たち

は心底疲れ果て、落ち込んだ。しかしそんな中、いち早く被災地的確な支援の手を差し伸べたのは、新潟県だったように思う。特に福島県に近かったせいもあるが、なによりも中越沖地震を経験した新潟県民は、痛みを知っていた。福島県人の痛みは、そのまま自分の痛みだった。

三条市に緊急避難した南相馬市の方々は口をそろえて言う。

「三条では、とてもよくしてもらった。故郷にはもちろん帰りたくて、南相馬の避難所に戻ったが、三条を離れたときは辛かった。三条市に残ってラーメン屋を再開した人もいるんだよ」

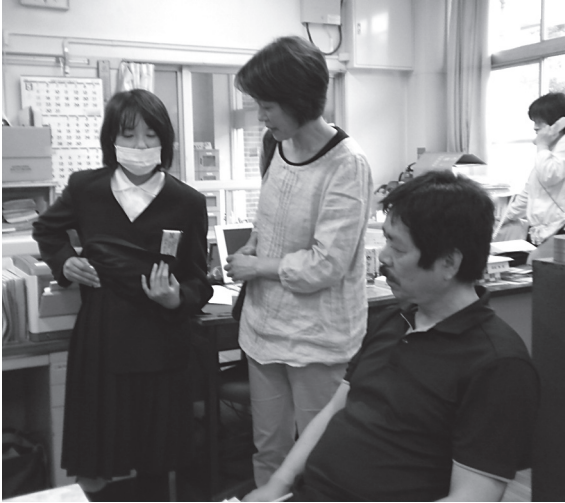
新潟県は机上の防災対策ではなく、平時でも、毎月一度、集まって災害時の行動を確認していると聞いた。また、電力不足がこんなに喧伝される前から、県民に節電を呼び掛け、県民一斉の計画停電を行っている。痛みが共有できるだけでなく、地方自治のあり方

にも大きな示唆を与えていると思う。津波で崩壊した東北のコミュニティ。いかに新しい地域を創生していくかが、今後の課題となってくる。

正確な情報の、より速い発信。的確な支援の配備。それは、災害がいかに関係なく、日ごろの暮らしやすい地域づくりにもつながるはずだ。

これから……

鶴島 綾子（南相馬在住）



鶴島さん（中央）の娘さん（左）もガラスバッジを付けて下さった（二本松北小学校で）

子どもを想う母親のころは、海よりも広く、深い。今、日本の母親は、誰もが見えない放射能から子どもを守りたい！ 願うことは同じだと思います。

私の家族は、夫、長男（高校3年）長女（中学3年）次女（小学6年）の5人。

そしてわが家は、原発から17キロのところであり、20キロ圏内の警戒区域であるため、地震の爪痕もそのままに避難し、未だ住み慣れた小高区の自宅へ戻ることはできません。

震災直後、夫は勤めていた福島第一原発から家路へと車を走らせたそうです。

道路の破損と、先を急ぐ車がいっせいに集まった大渋滞のため、しばらくすると車を乗り捨て、松の木をも飲み込む大津波を横目で見ながら、子どものいた小学校へと急いだと話していました。現在、夫は休職中です。

私は、原発から17キロにある南相馬市立小高病院で管理栄養士として働いていました。震災直後、家族の安否が気になりましたが、電話は不通となり、身動きもとれず、津波に備えて患者さんを上階に移動させていました。

集落、樹木、車、人々までもが一瞬にして流され、病院の直前まで津波が押し寄せ、濁流の中から生存できた人々が当院に助けを求めて集まってきたのです。

外来待合室に布団を敷きつめ、職員も津波から助かった人も一緒に過ごしました。ご飯を炊き、おにぎりをみんなで食べました。ただの塩おにぎりだったけど、それが美味しかった。最高のごちそうでした。

3月13日、福島第一原発事故。放射能漏れによる避難勧告。

予期せぬ地震、津波について原発事故、原発から20キロ圏内の私たちは直ちに避難を強いられました。

入院患者68名を23キロ地点にある南相馬市立総合病院へ一日かけて移送しました。もちろん、住民も各々がこの小高区から避難していきました。

長男は仙台の親戚へ。夫と長女、次女は千葉の親戚へ避難することになり、私は総合病院へ。私たち家族は、バラバラの避難になってしまいました。

当時の南相馬は物流が途絶え、ガソリン、食糧、日用品が全く手に入らなくなっていました。まさか、今の時代にそんな事を考えたことがあるでしょうか。街灯りが消え、お店のシャッターが閉められ、人影も消えてしまいました。娘たちは一つのカップめんを3人で分けて食べたといえます。

千葉へ避難する日、南相馬にある祖父の家で娘たちに会いました。病院に泊まり込んでいた私は、数時間いたただ

て娘たちに昼ごはんを作りに向いたのです。

材料がないので、冷蔵庫にあったネギをぶつ切りにして残っていたカレーで煮込んでネギカレーを作りました。

ねぎしか入っていないカレーを、夢中になって頬張る娘たちの姿に胸が詰まって、涙がこぼれました。

4月に入ると、学校の問題がでてきました。

小高区の小、中学校は原発から20キロ圏内にあり再開が困難なために、避難先の教育委員会で転校の手続きをとるように、という連絡がありました。

長男は小高区にある小高工業高校。同じように再開できず、県内の受け入れ校でのサテライト、転校、通信教育、いずれかの選択を強いられました。

どうすればよいのか、先が見えず、判断に悩むなかで日々過ぎていきました。

息子は小高工業高校の野球部に所属し、高校生活最後の野球にチーム一丸となって練習に打ち込んできました。

またもう一度、野球がやりたい。同じ仲間と野球をさせてあげたい。その想いに3年生野球部全員がサテライト校を希望し、二本松市に集合することになったのです。私たち家族も、避難場所を二本松市に移しました。

住む場所が見つからず、ようやく築40年の雇用促進住宅

に入ることができました。6畳と4.5畳の二間に台所、お風呂にトイレというところに5人で住むことになりました。もちろん、娘たちも転校し、慣れない学校生活に戸惑いながらも自分の今を受け入れようとしている姿がみえました。また、新しい学校の受け入れも迅速で優しく、戸惑うこともなく、新年度の始業式に間に合いました。

友だちもでき、新たな生活を過ごす中で、次女は時折、腹痛に襲われました。保健室の先生から「辛いときは我慢しなくていいんだよ」そう声をかけられた瞬間、娘の臉から涙があふれたと担任の先生にうかがいました。

長女は中学3年、今年は高校受験です。しかし、希望していた相双地区の高校は再開できるのか、進路希望をどうするか、悩むところです。

震災直後は、日付も把握できないほど気が張りつめた毎日でした。とにかく、避難するところ、住むところ、子どもたちの学校を、と無我夢中でした。

震災から4か月、ようやく改めてこれからのことを考えられる時が来たように感じられます。これからこの生活がいつまで続くのか、そして見えない放射能と生活を共にしていく私たちはどうしていけばよいのか……。

3月20日、物流の途絶えた南相馬に、JCFが第一団と

して最初に震災の支援に諏訪中央病院の医療チームと共に訪れてくれました。私たちの心にあったかい光が差し込んだのを忘れることができません。

今も子どもたちに線量計を配布して生活のアドバイスをしてきています。ありがたいことです。

原発から遠くへ離れることだけで問題は解決するのでしょうか。この避難生活でのストレスが、放射能よりも莫大な被ばく源になってはいないのでしょうか。

JCF理事長、鎌田實先生が「人は愛する人と仕事があれば生きていける」と話されました。家族愛、人との人情愛、繋がりが、そして絆。

震災で受けたどん底、でもそこから見えた、得たものがたくさんあります。

一人の力は限りがあります。でも人と人が繋がれば大きな試練も必ず乗り越えられるはずです。

どうすれば……。

そんな時こそ人との繋がりで「これから」を乗り越えたいと想える「今」になりました。



NO.4

未来への楽譜
スコア

宮尾 彰

あの日以来、折にふれてグランドゼロのバックナンバーを手に取ることが多くなりました。

二〇〇三年の冬に発行された第五十八号に、鎌田理事長とペラルーシの作家スベトラーナ・アレクシエービッチの対談が収録されています。

「今日、北海道から戻ってきました。そこには泊原発があって、チエルノブイリと同じようにとても美しい所がありました。今、原発が在るところは、かつて教会があったような美しい場所です」

一瞬、虚を衝かれました。対談の冒頭で彼女が漏らしたこのあまりにも素朴な印象が、今それを読み直す私には、とても象徴的な言説であるように思われます。

初めてのロシア（旧ソビエト連邦）旅行の際、私は古都スーズダリに『ロシア建築の白鳥』と賞される清楚な教会ポクロフ・ナ・ネルリを訪れたことがあります。

見渡す限りの大平原を流れるネルリ川の辺ほとり。純白の壁に小さな玉葱型の冠を戴いて佇むその姿には、彼の地に脈々と生を営み続けて来た民族の魂が、まじり気の無いままに美しい形となって刻まれています。果てしなく広大な自然の真只中、人の手に成るこの創造物がまるで可憐な一輪の花の如く周囲の風光との間に永遠の調和を保ちつつ建っているのです。中には入れなかつたものの、私はその内部に充ちる厳かな靈氣を感じました。

しかるに、目下「建屋」の中には放射能が充ち、誰にも何が起きているのか知れぬまま、時は流れています。

あの日以来、誰もが、まるで見通しの利かない闇の中を歩くように、不可解な時間の内に生きています。

アレクシエービッチが、その著『チェルノブイリの祈り』に「未来の物語」という副題を付したこの意味を、自身自身が日常生活の中で嘔み締めることになろうとは。

晴れた日のことでした。私は車を運転しながらふと桜の花が風に舞い散るのに気が付きました。花を見るのも失念したまま、季節は変わろうとしていたのです。その時、我知らず久しぶりに音楽を聴きたくなりました。

満を持して聴いたのは、ピアノスト館野泉によるバッハ作曲／ブラームス編曲のシャコンヌ。かねてから、知友に強く推されていた一曲でした。*

或る日演奏会のステージで脳溢血に倒れた後、長期間のリハビリを経て復帰を果たしたこの最初の録音には、作品と邂逅したピアノストの喜びが満ち溢れています。

左手一本で訥々と弾かれる約十五分の演奏。その終盤、かすかに奏者の呼吸が静まり、ピアノに触れる左手の力が和らぎ、あたかも朝の光に向って花々が少しずつ頭を上げ始めるように、音が流れ出すのです。

早天の慈雨の如き慰めに身を委ねつつ、私は、他ならぬ今この時にこの音楽と出会ったことに感謝しました。

「剥き出しの、これ以上は切り詰められない音」（館野）これは正しく、ブラームスがバッハという泉から汲んだ「音楽のエッセンス」そのものです。

再起の危ぶまれる事態に身を置く音楽家に、或る時思いがけなく『左手のための作品』が手渡され、そこから彼らまったく新しい音楽が拓かれました。

深く傷を負った人間を、「楽譜」が待っていたのです。

このかけがえのない演奏を聴いていると、作品に寄せる奏者の深い愛情と敬意の背後に、或る沈黙のような諒解が感じられてなりません。

あの日以来、不可測の現実に対峙しつつ、私たちは痛切な思いで「未来への楽譜」を探し求めています。

放射能にまみれた国土で新たな歴史を担う次ぎの世代に託す、せめてものつぐないとして。

*

『風のソネット』(AVEX - CLASSICS 2004)

シャコンヌはバッハ『無伴奏ヴァイオリン・パルティータ二短調 BWV1004』の最終楽章



ベジルーシの食卓

白夜の季節は夏野菜<ロビオ>

ようやく信州でも、露地物の夏野菜を食卓に並べられる季節になりました。夏至の頃は、ロシアは白夜の季節です。夜おそくまで森を散策し、若者達はパーティを楽しんだり、よい季節です。

モスクワ市内のノボデビッチ修道院の近く、湖に面してグルジア料理店「ピロスマニ」があります。店内は、ロシアのピカソとも称されるピロスマニの絵がいっぱい掛けられていて、コーカサス情緒あふれています。

グルジア料理は、独特の香辛料でスパイシーさが特徴ですが、新鮮なさやいんげんを使った料理を日本風にアレンジしてみましょう。

<材料 5人分>

さやいんげん 300g・くるみ 50g・玉ねぎ 1/4個
イタリアンパセリ&バジル&万能ねぎ等の香草を各1枝
ニンニク 1片・酢 大1・砂糖 少々・塩 小1・コショウ 少々

<作り方>

1. たっぷりの湯に塩（分量外）を入れ、さやいんげんを茹で、食べやすい大きさに切る。
2. くるみをフライパンで乾煎りし、すりつぶす。
3. 玉ねぎ、香草をみじん切りにする。
4. ボールに1・2・3を入れ、ニンニクをすり下ろし、調味料を加え、よくあえる。
*乾燥いんげんを使って、同様に作ってもおいしいです。お楽しみください。



モスクワ僣リ



この春、モスクワの全市民が福島第一原発の事故と津波のニュースに衝撃を受けました。いま日本に何が起きているのか、だれもが固唾を飲んで見守りました。まるで戦地から届く戦況報告を聞いているようでした。現実のものとは思えませんでした。日本と関係のない、現代とは異なる時代の映画を見ているようでした。真っ先に頭に浮かんだのは、1986年4月のあの出来事です。チェルノブイリ原発事故の新聞記事をいくら読んでも、私たちは信じるできませんでした。その原発事故で被災した白ロシアとウクライナの人たちを援助してくださった日本の皆さんが、いま、あの時の私たちと同じ状況にあるというのです！

「日本はどう？大丈夫なの？」、毎日友人たちが私に尋ねます。私の日本にいる友人たちのことを心配して、とくに私が事情に通じているわけでもないのに、毎日尋ねずにはいられないのです。なかでも恐ろしいのは、数千もの人が津波にさらわれてしまったというニュースでした。そんなに多くの人たちが一瞬にして消えてしまうとは、とても信じられませんでした。食料も水もないままに壊れた家屋の廃材に乗って漂流し、数日後に救助された人たちがいる、かなり高齢の方々も救助されたと聞いて、ほんとうに驚きました。日本はまだ寒い時期で、家を失った人たちは寒さにも耐えねばならなかったのですから。

ロシアのテレビ局が制作した福島第一原発の事故のドキュメンタリー番組が放映されました。チェルノブイリを訪れたことがある人なら、廃墟となったプリピャチの町を忘れることはできないでしょう。見捨てられたアパート、床にノートの散乱する小学校、荒れ果てた公園……。プリピャチから住民の姿が消えてすでに長い年月が経ち、いまではゴースト・タウンのようです。しかし日本では、たった今起きたばかりなのです。住民が強制退去させられた町に、荒廃の影はありません。きれいな新しい家、玄関前に咲き誇る花、町のあちこちで滅している信号機、そして理髪店やレストランに客を呼び込むネオンサイン。住民を失ってもなお、町だけが生きつづけているようで、恐ろしい思いがします。

どうか日本の皆さんがこの状況に打ち勝って、幸福を手になれますように！ 私たちの誰もが心よりお祈りしています。

イリーナ・ニコラエワ（モスクワ事務局）

振替用紙のメッセージから



- ◎南伊豆の友人達と開いた作品展の売上の一部です。福島原発被災者支援に使って下さい。
- ◎本当はボランティアで動きたいけど病で動けないので、お金で支援します。公的扶助で生活中なので、少額ですみません。
- ◎JCFは動きが速いです。敬服しております。
- ◎出来ることは小さいですが、少しでも力になれば。
- ◎被災地に行く皆様、事務局の皆様、くれぐれもお身体大切に。
- ◎人ごとではなくなって初めて気づく人の痛みです。今までの活動本当ありがとうございます。
- ◎和歌山県田辺市で4月10日にチャリティーイベントがありました。そこで販売したお菓子の売上です。
- ◎年金の一部です。すぐに役立てていただければ幸いです。
- ◎お花見した時に集めたお金です。関西で元気に長く支援していきたいと思っています。
- ◎チエルノブイリ25周年、フクシマ元年となりました。
- ◎いつもウェブを拝見しています、少額ですが役立てて下さい。
- ◎JCFは政府より頼れるスペシャリスト集団です。よろしくお願いします。
- ◎3・11の子ども・若者の顔がチエルノブイリ事故で来日した子ども達の顔に重なります。
- ◎この期に及んで未だ原発に賛成の人が6割いることにはがっかりしています。子どもにひどい汚物を残してしまうことになりませぬ。
- ◎未来の子どもたちへ脱原発です。
- ◎福島原発被災者、原発で作業する方の為、一日も早い沈静を願っています。また飼い主を待ちながら水も餌もなく息絶える置き去りにされた犬や猫。是非救って下さい。
- ◎美しい季節に、深呼吸もままならぬ

地を思うと胸がつぶれます。私たちは問われていると思います。少しでもお役に立ちますようにお願いします。

◎1か月少し連絡の取れなかつた南相馬の友人が都内に避難しています。本当に“ふるさと”に帰れる日が一日も早く来ることを願って！

◎チエルノブイリ事故から25年前に震災津波福島原発事故と言葉を失うことばかり、グランゼロが届くのを待っていました。きつと被災者支援をされるだろうと。もうされていたんですね。

◎人はまだ逃げられる。動物たちのためにも涙。早く平安な日々をと願うばかりです。

◎原発廃止！ できることで頑張ります。

◎親戚が宮城県名取市です。お見舞いを送ろうとしたら何とか生活できているので、どちらかに寄付をとの申し出でした。すぐに使って頂けるように送金します。

◎息の長い支援を願います。

◎あの地震の日からたくさんの悲しみを知りましたが、でも同じくらいたくさんの人の素晴らしさも知りました。私には少しのことしかできません。

◎2011年3月11日を絶対に忘れません。永遠に。

◎グランドゼロ春号良かったです。裏表紙のイラフちゃんのお父さんの絵がとてもユーモラスで思わず微笑んでしまいました。今も辛い思いをしている人々にも明るい日をと。

◎「売上の一部を原発震災被災者支援といたします」と記載して展示会を開催しました。原発被災者支援になればと思います。アメリカ、ニューヨークに住む息子、サンフランシスコに住む娘も近々そちらに送金します。

◎事務局の皆様ありがとうございます。お陰で気持ちの良い支援が出来ます。

◎87号の福島支援報告拝見しました。

素早い対応うれしく思います。少しでも協力させて下さい。

◎人形劇の公演先で私のカレンダーや人形などの作品をワンコイン500円で販売、売上を支援カンパに送ります。◎家あり、仕事あり、体力あまりなし、少なくてごめんなさい。

◎京都での活動に追われ大変に遅くなりました。どうか密着した支援をよろしくよろしくお願いします。イラクやペラルーシ、モスクワからの心あたたまるメッセージに感謝して、今できることを続けていきたいと心に刻んでいきます。

◎今回の震災を受けて福島県相馬市で震災派遣活動にあたりました。私たちの大学の先輩である加藤さんが南相馬で活動中とのことで、その応援ならびに相馬、南相馬への方々の応援として、今回支給された災害派遣費を送ります。

あの日何が起こったのか？

JCO臨界事故から福島

そして未来へ伝えたい事

谷田部裕子さんのお話を聞く会

横内香苗

4月末、北海道柏原発停止を呼びかけている仲間のメーリングリストを読んでいたある日、一人のお母さんの言葉が目飛び込んで来た。

「今まで原発を止めるためにできることをすべてやってきたけれど、足りなかったと悔やまれて落ち込んで、福島原発事故以来、今日初めて人前にでた」

札幌の集まりで話されたその女性は1999年の9月30日に起きた東海村臨界事故の際、JCOから約2キロにお住まいだった。

事故の重大さを知らずに子どもがずぶ濡れて帰ってきた当時の様子を語る会場は、涙・涙だったとメールは伝えてくれた。この方は福島原発事故をきっかけに伝えたい事があったのだらうと想像した。早速情報を発信したところ、JCFから連絡が届いた。そのお母さんが5月に松本に来

るといふのだ。お名前は谷田部裕子さん。JCFの会員でもありボランティアとして事務局にいらしたこともある方だった。松本の方にもお話を聞いていただくと思ひ、JCFの会場をお借りして会を設けた。

『あの日何が起こったのか？ JCO臨界事故から福島』
そして未来へ伝えたい事 谷田部裕子さんのお話を聞く会

参加者は15名。小さなお子さんを持つお母さんや元エンジニア、主婦など様々。中には広島島の原爆を体験なさった方もいらした。

谷田部さんのご実家は福島。まさか再びご自身の身内に放射能の恐怖が降りかかろうとは誰が想像しただろう。臨界事故後、映画上映や勉強会を一緒に行なってきた仲間と「やってきたつもりだったけど何もできなかったね」と福島原発事故を悔やんだそう。

しかし唯一希望が持てたのは、当時中学生だった仲間の子ども達が今回の福島原発震災事故直後、兄弟で連絡し合ひ、なるべく原発から離れた場所に動いた事だとおっしゃった。「子どもたちにアンテナが立ったね！」と仲間と話したそう。私も子どもを持つ母親として、目に見えない放射能の怖さをどう伝えれば良いのか？ 伝わっているのか？ が不安だった。「そうか、伝え続けなければならないのだ」

と教えていただいた。

参加者のお一人で小さなお子さんをおもちのお母さんは、お話を聞く前はあまり周りで放射能の話が出ないので「自分が心配し過ぎなのかな？」と思つていたと話して下さった。毎日テレビを見ながら不安で心が苦しくなつたと言う方もいらした。地震・津波・原発事故と今まで経験のない災害が続ぎ、気持ちを吐き出す事や共有する事、そして事故を経験なさつた谷田部さんのお話を聞く事により、気持ちが変わつた方もいるのではないだろうか？

参加者のお一人はその後、お母さん友達と放射能の事などを情報交換しているそうだ。

谷田部さんは臨界事故後、自分のような経験はもう2度として欲しくないと思ひ行動してきた方だ。福島で被災した方の今後のご苦労も、ご経験からきつと想像している事だろう。原発施設のある地域での活動や勉強会を行うに当たつては私たちの想像もつかないご苦労があつたに違いない。

命を脅かす危険な施設はあつてはならない。優先しなければならぬものは何なのか？ 行動し続ける彼女に勇氣を頂いた。

知らなかつたでは済まされぬ。自分も地球に暮らす一市民として力を生かして行きたい。

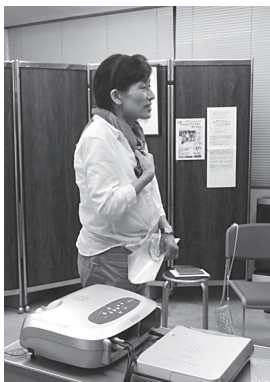
松本のお話しのに会に寄せて

谷田部 裕子

その日、JCFに集まつてこられたのは、大半がお互いに初めてお会いになる方々でした。私はJCO臨界事故とそれ以降の経験、そして福島への思いをお伝えしました。

チェルノブイリ事故からずっと心配してきた方、今回の事故で「知りたい」と考えた方と様々でしたが、「今、何とかしなければ」という思いが共通していたと感じました。中でも印象的だったのは、「非常にショックを受けた。今やこれだから心配。でも、その意識を周りと共有して行動することはなかなか容易ではない」という声でした。かつて私達もそうでした。

JCO事故で辛かつた事は幾つもあります。子どもの健康への不安と、守る努力をしてこなかつた親としての自責の念、土や水や空気を汚す申し訳なき、事故の



お話の会の谷田部さん

状況情報の開示の不十分さ、事故影響の過少評価、取り返しのつかない被害に遭われた方々の痛み……挙げればきりがありません。

健康被害や経済不安のみならず、社会不安、身近な周囲の人々と気持を通わせる事の難しさ、いわばつながり不安は、子育て中の母親の私達にとって辛いものでした。

短期間の臨界事故であれ程だったのですから、今回の過酷な核災害ではいかばかりかと、胸ふさがる思いです。

6月半ば、福島市の実家に帰省した時、福島県民30年健康調査という全国紙の大見出しが矢のように目に飛び込んできました。いつも元気で明るい近所の茶飲み友達は、「あたらしらモルモットじゃない……」とポツリとつぶやいて、避難区域の酪農家が飼う牛の最期をみとつてから自死した事を重い口調で話していきました。

襲つて来たのが津波ではなかったため、風景の美しさのどこかに変わりはありません。水も空気も美味しく、里山の木立の匂いも清々しいままです。家もあります。でも、子ども達の日常生活の安全性は今だ危うさにさらされています。つながり不安も、人によっては深刻です。核被害のリスクの受け止め方や対処や社会的境遇には個人差があるので、人間関係の摩擦やストレスは、時にとても厳しいのです。避難を決断した人もそうでない人も、学校給食を食

べる子も弁当持参の子も、家業に打撃を受けた度合いにも違いがあります。日常の中の厳しい選択を迫られる時、家族や地域の中で意見が分かれる事も多いでしょう。

原発は造る時にも壊れる時にも、何と多くの分断をもたらす物なのでしょう。心の傷は被災です。

なぜ、大切な大切な故郷が、核被害に苦しまなくてはいけなくなったのか？

JCO事故の時に抱え込んだ私の宿題は、3月11日、何十倍もの重さになつて、1日も忘れ得ずに百日が過ぎました。皆がお互いの差異を認めつつ、無用に傷つき合う事無く、話したい事を話しあつて、一人ひとりに必要な状態の実現に近づいていけるような、そんなつながりを日常の中に増やしていきたいと願っています。



お話の会の後、発言する参加者

Здра в ст вуйт е!

ヴラダン・コチさん 東日本大震災復興支援チャリティーコンサートのため来日



2010年広島原爆ドーム前、河川敷でのコンサート

山口豪（ヴラダン・コチ・チャリティー

コンサート実行委員会・世話人）

ヴラダン・コチさんは、3月11日震災直後よりチェコ・プラハに於いて、日本の被害状況を知り、再三に渡り心配し、連絡をして来てくれました。

コチさんは、今年8月27日、小林研一郎氏指揮によるフィルハーモニックアンサンブル管弦楽団（P・E・O）との共演、ソリストとして招聘依頼をされています。

来日に合わせたチャリティーコンサートの計画を立てている最中に、東日本大震災が起きました。急遽コチさんと相談し、是非、被災地に音楽を届けよう！と、お互いの意思を確認いたしました。

P・E・Oとのコンサートの後、東京、山梨でチャリティーコンサート、9月3日〜9日には、岩手、宮城、福島を訪れてコンサートをを行う予定です。東日本大震災復興支援チャリティーコンサートのスケジュールをお知らせします。

こんにちは！



コチファミリー 左二人目から、ハナさん、コチさん、ルツィーさん、一人おいてトーマスさん

☆フィルハーモニックアンサンブル管弦楽団 「祈り・希望・光」

指揮：小林研一郎、 独奏：ヴラダン・コチ、

* 2011年8月27日(土) すみだトリフォニーホール 開演 18:30
S席¥3,000 A席¥2,500 チケットぴあ (0570-02-9999) Pコード: 134-167

☆ヴラダン・コチ (チェロ) & 有吉英奈 (ピアノ) デュオリサイタル

「祈り・希望・光」

* 2011年8月29日(月) 府中の森芸術劇場 ウィーンホール 19:00 開演
全席自由、¥3,000 チケット: 室惇子 (042-366-7758)

* 2011年8月31日(水) 山梨県小淵沢アルソア本社3F 森羅ホール 19:00 開演
全席自由、¥3,000 チケット: ペンション風路 (0551-36-3826)
ペンション・あるびおん (0551-36-4166)

* 9月3日～9日 岩手、宮城、福島の被災地でコンサートを行います。皆様からお預かりした募金等を被災地に直接お届けいたします。ご協力の程、何卒よろしくお願いたします。

ヴラダン・コチ チャリティーコンサート実行委員会・世話人山口豪

*連絡先 TEL: 0551-36-5883 携帯: 090-1548-3081

新装版 チェルノブイリ原発事故

高木仁三郎



「新装版 チェルノブイリ原発事故」

著者：高木仁三郎

発行：七つ森書館

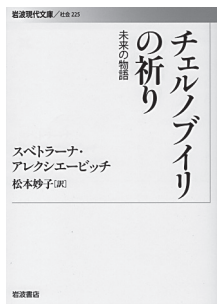
定価：1400 円＋税

本書は、チェルノブイリ原発事故が起きた1986年に刊行された『チェルノブイリ―最後の警告』と、88年に原子力資料情報室からブックレットとして刊行された『チェルノブイリ月誌』をまとめて、新装版として出版された。チェルノブイリからの「最後の警告」を受けとめられなかった結果が現在の状況である。

Book

チェルノブイリの祈り―未来の物語

スベトラーナ・アレクシエービッチ



「チェルノブイリの祈り―未来の物語」
(岩波現代文庫)

著者：スベトラーナ・アレクシエービッチ

訳者：松本妙子

発行：岩波書店

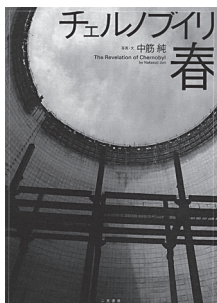
定価：1040 円＋税

「本書より」この本はチェルノブイリについての本じゃありません。チェルノブイリを取りまく世界のことわたしたちが：ほとんど知らなかったことについての本です／この本は人々の気持ちを再現したもので、事故の再現ではありません／何度もこんな気がしました。私は未来のことを書き記している……

Book

チェルノブイリ 春

中筋 純



「チェルノブイリ 春」

写真・文：中筋 純

発行：二見書房

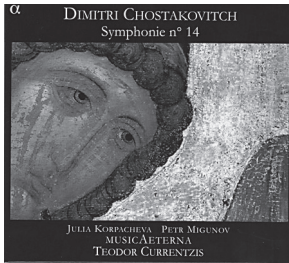
定価：2500 円＋税

本書は、2008年に刊行された『廃墟 チェルノブイリ』につづくチェルノブイリ写真集第二弾。チェルノブイリ原発事故で廃墟となった街や村の建物や人工物は緑に覆われ自然に還っていくようにみえる。しかしそこにはいまだに放射性物質による高濃度に汚染されたホットスポットが存在する。黙示録のような世界が映し出されている。

Book

ショスタコーヴィチ：交響曲第14番『死者の歌』

アンサンブル・ムジカエテルナ



ショスタコーヴィチ：
交響曲第14番『死者の歌』
演奏：
アンサンブル・ムジカエテルナ
ジャケット絵画：
アンドレイ・ルブリョフ
発売：マーキュリー
定価：2940円（税込）

1969年に作曲された交響曲第14番は、ソプラノとバスの独唱に弦楽合奏、打楽器という編成のために書かれた、全11楽章からなる作品。歌詞は、ガルシア・ロルカ、アポリネール、リルケなどの詩人の作品からとられている。弦楽器に一部古楽器を使用した、現代ロシアの精鋭陣によるまったく新しいショスタコーヴィチ解釈。

CD

こだま 時の罫

リサ・バティアシュヴィリ



「時の罫」
リサ・バティアシュヴィリ
発売：ユニバーサルミュージック
定価：2800円（税込）

リサ・バティアシュヴィリは旧ソ連・グルジア生まれのヴァイオリニスト。1991年のグルジア動乱でドイツに移住。本CDでは、ショスタコーヴィチ「ヴァイオリン協奏曲第1番」のほか、ギヤ・カンチエリ（グルジア）、アルヴォ・ベルト（エストニア）、ラフマニノフと、旧ソ連圏の作曲家の作品が取り上げられている。

CD

フィアレス

イリーナ・ミハイロバ



「フィアレス」
イリーナ・ミハイロバ
発売：MUSIC CAMP
定価：2625円（税込）

イリーナ・ミハイロバは、カザフスタン生まれのロシア人女性歌手。サントペテルブルグ、プラハを経由して、現在はサンフランシスコを拠点に活動している。本アルバムは、バルカン、東欧、中東（ヘブライ）や、ケルト、中央アジアの伝統音楽などの要素を取り込んだ「イリーナ流世界伝承歌曲集」となっている。

CD

ヒロシマ・ナガサキ 原 民喜、ほか



コレクション 戦争と文学 19
「ヒロシマ・ナガサキ」
著者：原 民喜、ほか
解説：成田龍一
発行：集英社
発行記念特別定価：3400 円＋税

Book

集英社の創業85周年記念企画「コレクション 戦争と文学」(全20巻+別巻1)の第一回配本。戦後世代が次代に継承すべき遺産として、現代の読者に向け、あらたな視点に立つて精選した、平成版・戦争文学アンソロジー。本巻は、ヒロシマ・ナガサキをテーマにした作品のほか、核開発や原発を扱った作品も収録。

司修のえものがたり 司修



「司修のえものがたり」
著者：司修(つかさ・おさむ)
企画：群馬県立近代美術館
発行：トランスビュー
定価：2800 円＋税

Book

本書は、今年4月から6月にかけて群馬県立近代美術館で開催された、司修の絵本制作に注目した「司修のえものがたり」展の図録として出版された。群馬県前橋出身の司修は、画家、装幀家、小説家と多彩な顔をもつ作家。油彩、水彩、版画、CGなど、様々な手法を駆使して物語の世界を表現した絵本原画を紹介。

「空海と密教美術」展 東京国立博物館



「空海と密教美術」展
開催期間：
2011年7月20日～9月25日
会場：東京国立博物館 平成館

Art

日本にはじめて真言密教を伝えた、空海ゆかりの密教美術作品を集めた展覧会。空海が中国から請来した絵画、仏像、法具など、また空海の構想によってつくられた京都・教王護国寺(東寺)講堂の立体曼荼羅から8体の仏像、「阿界曼荼羅図」、現存する空海直筆の書5件など、真言密教美術の源流を展覧。

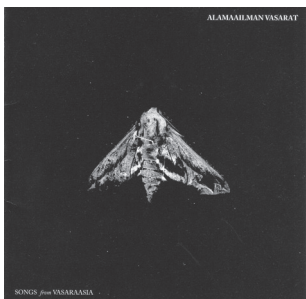
細川俊夫：フルート作品集 コルベイン・ビャルナソン



「細川俊夫：フルート作品集」
コルベイン・ビャルナソン
発売：ナクソス
定価：オープン価格

CD
広島出身でベルリンを拠点に活躍する作曲家・細川俊夫のフルート作品集。「私にとってフルートは、私の音楽の考えを最も深く実現できる楽器である。フルートは息によって音を生み出すことができ、息が音のいのちの力を伝える媒体となる」（細川俊夫）。コルベイン・ビャルナソンはアイスランドのフルートの名手。

ソングス・フロム・ヴァサラーシア アラマーイルマン・ヴァサラット

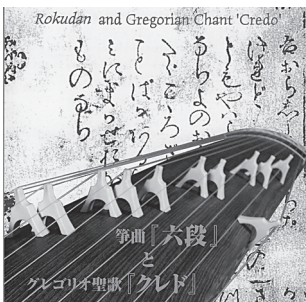


「ソングス・フロム・
ヴァサラーシア」
アラマーイルマン・
ヴァサラット
発売：P-VINE RECORDS
定価：2500円（税込）

CD
「アラマーイルマン・ヴァサラット」は、フィンランド・ヘルシンキのインストゥルメンタル・バンド。サクソ、トロンボーン、チェロ2台ドラム、キーボードというユニークな編成。本作は、今年5月の来日公演のために編集されたコンピレーション・アルバム。「ヴァサラーシア郷」（架空世界）のワールド・ミュージック。

箏曲『六段』とグレゴリオ聖歌『クレド』

～日本伝統音楽とキリシタン音楽との出会い～



CD
監修・解説・指揮：皆川達夫
演奏：野坂操壽（箏）、
中世音楽合唱団、ほか
発売：日本伝統文化振興財団
定価：3150円（税込）

CD
本CDでは、箏の名曲『六段』の成立にあたり、ヨーロッパ音楽、ラテン語聖歌『クレド（信仰宣言）』の影響が決定的に大きかったという問題を提起している。また、天正遣欧少年使節がヴェネツィアを訪問したとき演奏された歓迎ミサ曲や、帰国した少年使節が秀吉御前で演奏した曲なども収録されている。

Information

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）活動紹介

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は1991年1月に設立されました。1986年4月26日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故の放射能被災地へ、主に医療を中心として支援活動を展開しています。

支援開始当初のベラルーシは、深刻な経済状況で、白血病など病気の子ども達は、十分に治療を受けることができませんでした。衛生管理もできなかったために、多くの子ども達は感染症などで亡くなっていました。JCFは、現地の医師らと話し合いながらプロジェクトを組み、信州大学などの医療従事者と共に着実な支援活動を続けてきました。

そして2004年、活動の支援先はイラクへも広げられました。イラクでは湾岸戦争以後に白血病が急増しています。長期にわたった経済制裁後、新たに起きた戦争で極端に物資が不足、子ども達の治療もままならず、多くのいのちが失われています。



日本イラク医療支援ネットワーク（JIM-NET）

イラクにおける小児がん（おもに白血病）医療支援のためのネットワーク。医療支援を行っている NGO や関心のある医師たちが、専門性を持ち、過不足のない支援を（イラクの人々が自分たちできちんとした治療ができるようになるまで）継続的に続けることを目指して立ち上げた。JCF も構成団体の一員。

website <http://www.jim-net.net/>

◆ JCF 会費振込口座

正会員年会費（1口）	10,000円
賛助会員年会費（1口）	3,000円
郵便振替口座番号	00560-5-43020
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

◆ JCF / イラク支援振込口座

血液成分分析機購入、医師招聘研修、薬品購入

郵便振替口座番号	00520-0-81078
加入者名	JCF / イラク支援



第 88 号

発行日 2011 年 7 月 26 日

発行人 鎌田 實

発行所

日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字 貝原 浩

イラスト 樫野ひかり

小林裕子

スタッフ 神谷さだ子

布山みな子

宮ノ尾秀彦

横内香苗

協力 寺島仁美

J I M - N E T

風樹光

印刷 電算印刷

■編集後記

6 月 30 日、松本も震度 5 の地震。事務局もスタッフも無事だったが、被害にあった家屋や学校、公共施設も多い。東北で震災に遭われた方のお気持ちを想像していたつもりだったが、いざ自分の足下が揺れ、余震が続く中で生活すると、身体の中に走る恐怖やいつも心が晴れない不安な生活のストレスは体験して初めてわかった。その上に放射能の恐怖があるというのだ！友人は「大地震に対してはいつ死んでもいいように日々を悔いなく生き、もし生き残ったら支え合って生きるしかない」と言う。なかなかその覚悟にはたどり着けないが、天災である地震にはなすすべが無いとしても、人災である原発を無くしていかなければ！ (布山)

販売物紹介

Book

- ・「チェルノブイリからの伝言」
J C F 編 (オフィスエム) 1200 円

CD

- ・「小室等／ベラルーシの少女」
(8cm シングル盤) 1000 円

◆がんばらないレーベルCD

- ・「ヴラダン・コチ／ふるさと」
2500 円

- ・「坂田明／ひまわり」
2500 円

- ・「坂田明／おむすび」
2500 円

ドクターかまちゃんの寒天ゼリー

1000 円

* 販売物の詳細は事務局にお問い合わせ下さい。

●特定非営利活動法人

日本チェルノブイリ連帯基金 (J C F)

〒 390-0303

長野県松本市浅間温泉 2-12-12

TEL 0263-46-4218 FAX 0263-46-6229

E-mail asama@jcf.ne.jp

Website <http://jcf.ne.jp>





家族の絆

ヌール・アッバース 9歳

バスラ

ホジキンリンパ腫

ヌールは、現在イラクを離れ、イランで放射線治療中。早く元気になって、お父さん、お母さんと暮らしたい。原発が事故を起こし、放射能が子ども達を苦しめる。核の平和利用は、医療分野しかないのかもしれない。